

University Academic Repository

現代英語におけるVerbalと修辞法の研究

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-04-30 キーワード (Ja): キーワード (En): Semantics, Rhetoric, Implicature, Ambiguity, Dramatic present, Aspect 作成者: 松嶋, 哲雄, マツシマ, テツオ, Matsushima, Tetsuo メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/219">https://kaetsu.repo.nii.ac.jp/records/219</a>

# 現代英語における Verbal と修辭法の研究

## A Study of Verbal Usages and Rhetoric Phrases in News Headlines

松嶋 哲雄

Tetsuo Matsushima

### <要約>

本論文は、定期的にインターネットおよび紙面という形で発信されているジャーナリストが書いた英語から見出し表現に用いられた準動詞の事例に関し、語法 'Semantics'、および修辭学の二つの観点から分析し、語法と修辭手法の二つが各事例でどのように組み合わせられているのか、またどのような表現効果があるのか検証し、それにより変化を続けている現代英語の断片を捉え、生きた言葉の使われ方を解明することが目的である。

ここ数年内に発行された *TIME* 誌, *Newsweek* 誌の中で、準動詞を駆使した見出し表現を研究資料として、現代の Journalists が準動詞を用いたレトリックにどのような表現上の「あや」と表現効果が生み出されているのか、そこに盛り込まれている真のメッセージや変化する英語の語法、および表現の多様性とを吟味しようとすることを本論文で試みる。

### <キーワード>

Semantics, Rhetoric, Implicature, Ambiguity, Dramatic present, Aspect

### <はじめに>

本論文では準動詞 Verbal が現代英語でどのように修辭法 Rhetoric として活用されているのかを分析する。準動詞の現代における具体的な活用方法を把握することで変遷している語法の新しい使い方が明らかになると考えられる。

準動詞を含む各事例をまず、Semantics の視点から吟味し、現代英語の特色、その中でも多岐にわたり社会的な影響を持つとされている Journalists が使う修辭的手法の視点からも解明を試みる。

研究材料にここ数年以内に発行されたアメリカ英語の語法や用例を代表する *TIME* 誌<sup>1)</sup> と *Newsweek* 誌<sup>2)</sup> から準動詞を用いた見出し表現を事例として収集した。見出し表現を研究の対象に選んだ理由は、見出し表現というものは、最少字数で最大の伝達効果を目指し、それに続く長い本文内容を簡潔、かつ様々な修辭法を高度に駆使し、練り上げて表出された

文であり、そこに現代英語の言語学的、修辞学的知識と技術が凝縮されていると考えられるからである。

まず、始めに Present progressive の事例、次に Gerund の事例、最後に To infinitive の事例を扱う。本論文で研究の対象とした事例は計17例である。

## <本 論>

### A. Present progressive 事例

#### 1. Suggestion の事例

##### “Refining the Problem”<sup>3)</sup>

この事例表現の次に、小見出しで “Prices at the pump are climbing, but crude oil isn’t the only culprit” と記し、ガソリン値上げの原因が原油ではないことを唱えている。また、本文で世界情勢を考慮すれば、精製設備の増設が急務であることを以下のように力説している。“Is there an easy fix? Obviously, building new refineries is one answer. … Trouble is, new refineries don’t spring up overnight. … In the meantime, a secondary oil shock – be it another hurricane or a terrorist attack – could give all of us a nasty taste of what oil dependency really means.” この点を考慮すれば、動詞 ‘refine’ は多義性を含んでおり、この “Refining” は問題真相を ‘Clarify’<sup>4)</sup> すること、同時に石油精製の両方の意味を含んだ修辞法 ‘a double entendre’ であると捉えられる。また、語法は一種の Participial Construction であり “If you refine the problem” と書き換えられる。つまりこの事例の ‘Refining’ は今までと異なる何か新しい見方を提案している “Suggestive” 効果を生んでいることになる。この場合の伝統的修辞法で言えば ‘amplification’ の ‘Ratiocination’<sup>5)</sup> と考えられる。

#### 2. Criticism の事例

##### “Praising Folic Acid”<sup>6)</sup>

次の小見出しでは “Could the B vitamin that helps prevent birth defects also protect against Alzheimer’s?” とあり、それに続く the opening paragraph で “Should everyone be getting more folic acid? That’s the question on a lot of doctors’ minds this week.” とある。葉酸を十分な知識に基づかず摂取することは Debatable と読者に問いかけている。‘Could’ ‘Should’ という Hypothetical を示す表現を使用している点を考慮すれば、‘Praising’ は葉酸の真の効果を確認する必要性があるとする一種の助言を含意しており、葉酸に関する不十分な知識での賞賛の意味で解釈すれば Grice の術語である ‘Conversational implicature’<sup>7)</sup> で

あり 'Irony' と考えられる。また動詞 'Praise' は現在使われている意味「賞賛する」の他に古くは 'appraise' の意味<sup>8)</sup> があり 'Praising' の語に二重の意味が含まれている。この二重の意味「賞賛する」と「確認のために価値を評価する（この事例では小見出しや本文を考え合わせ、批判的な要素が含まれている）」と捉えると、この事例は修辭法で言う 'Ambivalence'<sup>9)</sup> の一例となる。

### 3. Current trends の事例

#### "Is Europe Drinking Too Much?"<sup>10)</sup>

次の小見出しで "For a new generation of young people — especially teenagers — bingeing is all the rage" と解説を付し、本文ではヨーロッパの若者の間でアルコール消費量が急増し、それにより様々な治安問題や健康問題を引き起こしている現状を報じている記事である。この Progressive form の事例に関し、本文中で過去形や完了形が複数の箇所使われている<sup>11)</sup> ことも考慮すれば、今までとは変わってしまった状況 "It's different from the past."、さらに近未来の先行き不安な今後の予測を暗示している。事例の文の終わりにある疑問符は読者に問題を投げかけて 'Problematic' として、執筆者の主観的な意味の警告を暗示している。

### 4. Ending in the near future を暗示する事例

#### "The Fat Lady Is Singing"<sup>12)</sup>

この文の下敷きとして、'It isn't over until the fat lady sings'<sup>13)</sup> という慣用表現が使われている。その中の現在形動詞 'sings' を 'is singing' に変えることで、「終了までにはまだ時間がある」という意味<sup>14)</sup> が、「事実上ほぼ終わりの状態に入っている」という意味上の変化が生じている。換言すれば "... she is singing." は "... she has almost finished singing." と考えられ、近未来完了を暗示していることになる。

### 5. Recent fact の事例

#### "Fiddling After Paris Burned"<sup>15)</sup>

この事例の下敷きとなっている文は "Fiddle while Rome burns"<sup>16)</sup> であるが、それをもじり、"Burns" を "Burned" に、"While" を "After" に置き換えている。また、執筆者は自分のメッセージを小見出しで短く "A month after wide-spread riots, France's efforts to address the 'root cause' of the unrest are looking more and more like purely cosmetic changes." と示している。このことから執筆者の意図は、単に現状報告ではなく、過去に遡っての問題究明である。従って、「以前から継続的に」政府や役人が現実逃避や口先だけの約束を習慣的にやってきた体質とする記事内容を簡潔に伝える表現に練り上げたことになる。つまり、見出しの文は 'They were fiddling after Paris burned' と言い換えられる。さらに、修辭形態 (figure) から文中の語 Paris を捉えると、本文ではパリの都市だけでなく広くフランス全土、

およびフランス政府を暗示している。これは提喩 (synecdoche) の代表的な事例である。

## 6. Continuance の事例

### a) “Big Brother Is Watching”<sup>17)</sup>

次の小見出しは “A journalist retraces George Orwell’s steps in Burma.” となっており、キャプションは “PROPHETIC: Did Orwell’s novels ‘1984’ and ‘Animal Farm’ foretell Burma’s totalitarian rule?” となっている。この事例の下敷きは George Orwell’s の小説「Nineteen Eighty-Four」中の ‘Big Brother is watching you’ であり、これは Orwell 自身1920年代ビルマでの生の体験も含め、彼が生んだ表現である。筆執者はここで “Big Brother has been watching.” と表現せず、慣用表現の時制 Present Progressive Form をそのまま使うことにより、軍事政権化で昔と比べて、全体主義の全く変化していない状況が一層強調されている。この点では、歴史的現在進行形 (Historical present progressive) を応用した表現手法<sup>18)</sup>とも考えられる。しかしこの記事の要旨はビルマが昔も今も変わらない点と、Orwell の予言が的中している二つの点であるので、ただ単に「過去の出来事が眼前に起こっているかのように、生き生きと描写することを狙った」だけではなく、それ以上の効果を表出させる用法となっている。ここで使われている動詞 ‘watch’ は一般的に自動詞と他動詞の両方で使われる動詞である。Semantic の立場からその “watching” を捉えると、もじり表現に使ったもとの文には ‘you’ があるが、この例ではその目的語が省略されている。動詞 ‘watch’ のすぐ後の目的語を省略する語法に関して、聞き手の ‘Attention’ の問題であることを R.M.W. Dixon<sup>19)</sup> は言及している。さらに Orwell の予言が的中している点が記事の要旨であることを考慮すれば、普通は強く発音されない単語 ‘Is’ にストレスを置いて読むべきと考えられる。

### b) “Big Brother Is Talking”<sup>20)</sup>

これは中国でネット上のメールを当局が政治統制のためこっそり検閲している現状を報じる記事であるが、前述の事例同様、Orwell の Big Brother を修辞表現に使っている。ただし前述の a) の場合と異なるのは、現在の状況の説明であり過去と現在を比較する観点はなく、‘Watching’ を ‘Talking’ に変えただけの「もじり表現」と考えられる。また、Orwell の ‘Big Brother’ という文学用語がこの事例では現代中国の一面を報告するのに使用されている。これは Orwell のその用語が普遍性 ‘Universal truth’ をもつ表現として英語圏で使用されている証拠である。

## 7. Conversational style の事例

### “Spain Is Talking About…”<sup>21)</sup>

Present Progressive Form と省略の組み合わせ表現である。省略された部分 ‘…’ を見て、読み手はどんな記事か推理してしまう<sup>22)</sup>。本文ではスペインで空から降ってくる得体の知

れない氷の塊が目下話題となっており、その正体を科学調査委員会でも解明できないこと<sup>23)</sup>を報じている。この記事の筆執者は Progressive Form と省略手法の組み合わせで、スペインの科学者と国民が未確認落下物に対し抱く不思議な感情を読者にも共有してもらう意図が窺える。この場合のようにくだけた会話口調の文体として Present progressive は、イギリス英語に比べてアメリカ英語の口語で多用されていることが指摘されている<sup>24)</sup>。この事例の場合、会話体を書き言葉の見出しに使うことで、読者に対し文の印象度を高める効果を執筆者は狙ったものと思われる。

## B. Gerund の事例検証

### 8. Brevity の事例

“Eating fish is good for hearts. Mercury may be bad. Which matters more?”<sup>25)</sup>

この事例は小見出し表現で、見出しのほうは“Fish Oil and Toenails”となっている。魚油の健康への効能と含有されている水銀の有害性について論じた記事である。この Gerund を用いた ‘Eating fish is good for hearts.’ の文は、いままでの医学的研究で魚油の効能が世間に知られていること、さらにその摂取を推奨する意味合い<sup>26)</sup> とが含まれている。もし、この小見出し表現を ‘It is good for hearts to eat fish.’ と言い表すと、これから（今まで摂取したことがなかった人に対し）魚油の摂取を始めるべきであるという客観的意味が含まれてしまい、この記事の執筆者の意味する所とややズレが生じてしまう<sup>27)</sup>。

修辭学の観点からは、後置の “Mercury may be bad.” と対比させているので、‘Contrarium’<sup>28)</sup> の事例と考えられる。

### 9. Reification の事例

“Talking Is Dangerous”<sup>29)</sup>

本文ではパキスタンのある大学教授が授業中、マホメットを冒瀆する言葉を発したとして死刑判決を受けた事件を報じている<sup>30)</sup>。記事の執筆者はすでに発生した実際の事件に基づいて警鐘を鳴らしている。事例の文を ‘It is dangerous to talk.’<sup>31)</sup> と書けば、具体的な事件を念頭に入れずに、「今後の予想」として、口を滑らせば身に危険が迫るであろうという意味合いになってしまう。また、これを ‘To talk is dangerous.’ と書くと、具体的な事件は関係なく堅苦しい口調、あるいは仰々しい ‘Grandiose’ 的な言い回しとなり記事の「事件性」が薄れてしまう。この ‘Talking’ は Bolinger の用語<sup>32)</sup> で解説すれば「具象性・現実性 (reification)」の典型的事例である。さらに名詞を用いて “Talk is dangerous.” と表現すれば、「聞き間違いされる危険がある、またほうわさには耳を貸さないほうがよい、さらに実行を伴わない口先だけの話は危険を伴う」などといった記事の趣旨と外れたメッセージとなって

しまう。

## 10. A Double Entendre の事例

### “TIMING IS EVERYTHING WHEN IT COMES TO HORMONES”<sup>33)</sup>

この事例は本文中の真ん中に挿入された caption 表現である。見出しは “MENOPAUSE: BEYOND HOT FLASHES” となっており、更年期障害のホルモン療法の記事である。

この場合の ‘TIMING’ は二つの意味を含んでいると考えられる。一つは ‘good timing’ 「計画的に調整されたよい時機」<sup>34)</sup> と、もう一つは ‘being well timed’ 「偶然よい時に」である。しかし、本文を読み進めていくとやはり、‘good timing’ と読み取れるのである。従って、この場合は ‘Ambiguity’ よりも曖昧性 ‘Vagueness’<sup>35)</sup> の事例表現と考えられる。

## 11. Emphasizing by Negating の事例

### “Winning Isn’t Everything”<sup>36)</sup>

本文ではイラクの選挙で劣勢となったスンニ派が政権争いをめぐり重要ポストの獲得を目指していることを報じている。上記見出しは諺である ‘Winning is everything.’ に否定の語を加えて部分否定の意味が生じ、敗北をまだ認めず逆転を目指している<sup>37)</sup> という言外の意味が生まれている。このように本来は肯定文の慣用表現を否定文に変えることで、新しい語感が生まれ、読書意欲が掻き立てられるような表現手法である。

## 12. Persuasion based on experience の事例

### “It’s Easy Being Green”<sup>38)</sup>

トヨタが環境に配慮して開発したハイブリッド車「プリウス」を報じた一種の Advertorial 記事である。この見出しは ‘It isn’t easy being green’ のもじり表現で、もとの慣用表現の否定文を肯定文に変えた事例の文も一般に多用されている。ただし、この場合は、副次的意味 (connotation) では否定文と肯定文とでは厳密には対立していない。否定文の場合は「言い訳じみた感じ」のニュアンスで、肯定文は何かを説得するような場面で使用される。この違いを三名のアメリカ人インフォーマント (二十代、三十代、四十代でいずれも大学卒) に確認したところ、三名とも同様なニュアンスの相違を認めていた。ただし、この点に関しては事例中の ‘easy’ が ‘evaluative’ の要素を含んでいると考え、Semantics の用語 ‘Polar Opposition’、あるいは ‘scope of negation’ からの分析も可能性はあるが、今後の研究課題に委ねる。また、この事例で使われた Gerund の ‘Being’ には、既述したように具体的経験 (実際に乗ってみて) から、環境に優しい点、かつ使い易さもある点で読者に勧める執筆者の気持ちが汲み取れる。さらに、この事例中の ‘Green’ は言語学で言う ‘Ambiguity’<sup>39)</sup> であり、多義語 ‘lexical ambiguity’ の一例である。一般読者は ‘Green’ という語が環境意識の社会的な高まりとともに ‘ecologically friendly’ というよい意味で捉えやすいが、一方でこの事例

の文は子供向けテレビ番組 *Sesame Street* で使われる歌の句であり 'a identity problem', 'an expression of unhappiness' という悪い意味も持ち合わせている。その文を見た瞬間、どちらの意味か、場合によってはそれ以外の意味が一瞬迷ってしまう。従ってこの 'Green' は両義性の事例といえる。

### 13. Process の事例

#### "GETTING THERE'S ALL THE FUN"<sup>40)</sup>

これは大富豪のレジャーの新しい楽しみ方を紹介する記事で使われた Gerund の事例であり、"Process" の用例<sup>41)</sup>である、つまりこの場合「目的地まで移動する過程での体験、あるいは移動方法」<sup>42)</sup>という意味合いである。これを "To get there is all the fun." と表現すれば、To get there には 'Process' の意味はなく、「目的地への到着それ自体」を表すことになってしまう。なお、事例中の GETTING に替え ARRIVING にした場合、'Process' でなく「目的地への到着」の意味となり、動詞 'get' と 'arrive' における用法の違いが存在する。

## C. To Infinitive 事例の吟味

### 14. Recommendation の事例

#### 'IT'S BETTER TO BELONG'<sup>43)</sup>

この見出し表現は、'belong' 以下を省略することで読者の関心を惹きつける効果を狙った表現である。しかし、見出し表現で省略した部分は執筆者が一番伝えたいことであり、それが次の本文の一部で見つかるよう配置されている。本文中で執筆者は、新種のクラブ 'members' clubs welcoming women, members with champagne, celebrities, and late night extravagance' に所属することで得られる特典を紹介している。従って、この記事はいわゆる一種の 'Advertorial' と考えられる。換言すれば、この事例は To infinitive を使った "Recommendation" 用法で筆者がお勧めの対象が何かを意図的に省略した事例である。

### 15. Omission の事例

#### "EASY TO BE GREEN"<sup>44)</sup>

この事例の記事は環境保護に役立つ日常生活の知恵に関する書籍を紹介する Advertorial、あるいは書評である。To infinitive が使われているこの事例と既述した Gerund を用いた事例 12 においてもじりの下敷きとして用いられた表現はともに同じ慣用表現である。この二事例を比べることで不定詞と動名詞の用法の違いが明確になるとと思われる。まずこの不定詞の場合は 'It's' あるいは 'It is' が省略されているが、「聞き手に対し説教的で時間的にこれから始めるべき (未来)」という言葉外の意味を伝えている。一方、事例 12. の Gerund を使っ

て表現された事例は「話者の経験（過去）を基に何かを勧める」場合に使われる用法である。

## 16. Over-inflated の事例

### “To Be Pragmatic Is Glorious”<sup>45)</sup>

この記事は米中関係を扱った記事であるが、文中で “For both countries, being pragmatic and reaching an accommodation with each other has become a matter of the highest policy priority.” と Gerund で二国間の現状を言い換えている。このように見出し表現の主語に To infinitive が使われているが、一般的には To infinitive は慣用表現や諺以外は、普通は主語に用いることは少ない。この場合であれば、‘It is glorious to be pragmatic.’ と表現される。To infinitive を主語とする文は ‘Biblical’ ないし ‘Preaching’ の文体や修辞学的表現で多く使われる。つまり、執筆者が見出し表現として堅苦しい文体を意図的に使うことで、個人的意見を表わそうとした事例と捉えられる。また、修辞学の立場からは、二つの形容詞 ‘Pragmatic’ と ‘Glorious’ とが一つの文中で、意味上対立的 ‘rational vs. emotional’ に使われており、一種の Irony を暗示している例と考えられる。

## <結 論>

### 1. 諺や慣用表現の応用

見出し表現の事例には、諺や馴染の慣用表現、さらに古臭い構文が表現材料として多用されており、それに対して伝達効果を狙って様々な語法的かつ修辞学的な手が加えられている。

2. Present progressive の事例に関しては、「相」‘Aspect’<sup>46)</sup> という言語学の術語から分析した。しかし、この進行相の研究は現在も発展中<sup>47)</sup>で、諸学説あり、その概念も多様になっており、社会や時代の変遷の影響も受け易い。その具体的な用法に関し、その語法上の容認性の点で Semantics 研究者<sup>48)</sup> や Native speakers of English の間で、さらにはイギリス英語とアメリカ英語の間で差が生じている。そのことも含め、今回の研究においては『テンスとアスペクトの語法』柏野賢次著の研究成果を参考に事例の分析を行った。

3. 前掲した Gerund 事例 8. 9. 10. 11. 13. の 5 例はいずれも主語の位置で使われているが、変形生成文法の用語で言えば Gerundive nominalization の例である。こうした事例を Gerund の特性を歴史的な発達から捉え、現代で使った場合の伝達効果を解明したり、動詞を機能や意味から分類し語用を分析する Semantics の立場（学者によりその分類方法や定義が異なる）から検証する必要があるが、今後の研究課題としたい。

4. 見出し表現で使われた Gerund と To infinitive に関し、その語法上の微妙な意味の違いを応用し、メッセージを簡潔に伝えていることを明らかにしてきた。紙面による購読者およびインターネットの読者が、特に non-native speakers of English である場合、その真

のメッセージ 'Implicature' を十分に汲み取る手立てとして、Semantics および Rhetoric の研究成果が役立つと言える。

5. 上述したように世代間で表現方法の差が見られる現状では、英語自体が変化し多様化しているため、それに応じて変化する語法の継続的な研究が求められる。

## 注

- 1) *TIME* 誌は *TIME Asia* 版を使用
- 2) *Newsweek* 誌は *Newsweek International* 版を使用
- 3) *TIME*, Sep. 26, 2005, p.56
- 4) *Shorter English Dictionary of Oxford* 2003 年版では動詞 'refine' を次のように定義している。  
"make clearer or more subtle", "free from imperfections or defects" とあり、この事例では本文の内容も考えればただ「原油を精製する」と言う意味だけでないことになる。
- 5) Brigham Young University では、古典と現代修辭学の用語を解説した 'Online resource' を開設している。その中の *The Forest of Rhetoric Silva Rhetoricae* では "Figures of Reasoning" の細目中 'Ratiocinatio' を "Reasoning (typically with oneself) by asking questions." と説明している。(http://humanities.byu.edu/rhetoric/silva.htm)  
また、現代言語学辞典(田中晴美編、成美堂、1988年)では 'amplification' (敷衍) の項で「この用語 'amplification' は、ローマの修辭学者クウィンティリアーヌス (Quintiliānus) に由来し、ラテン語 amplification は「増加、拡充」の意味で、彼はこれに incrementum (漸進法)、comparatio (比較)、ratiocinatio (間接的言及)、congeries (累加) の四種を区別した。」
- 6) *TIME*, March 11, 2002, p. 54
- 7) 「(会話の含意) Grice (1975) の用語で、語用論 (pragmatics) における最重要概念の1つを表す。……中略…… Grice は、まず「言う」(say) に対する動詞として「含意する」(implicate) を採用し、後者から「含意(作用)」(implicature) および「含意(されたもの)」(implicatum) という名詞を誕生させた(ただし、彼は、ほとんど常に、implicature を implicatum の意味で使用している。) ……中略…… Grice の考えが注目された大きな理由の1つは、皮肉 (irony)、隠喩 (metaphor)、緩叙法 (meiosis)、誇張法 (hyperbole) などの文彩 (figures of speech) を会話の含意と結びつけて彼が論じたことである。」
- 8) コンサイス英文法辞典 安井稔[編] 三省堂 1996年 p. 54 に、'amelioration of meaning' の項で、'意味の特殊化' (specialization of meaning) の良化の説明として、『単語の意味が、倫理や威信などの価値基準から判断して、望ましい方向へと変化すること、歴史的な意味変化の過程の1つであり、意味の悪化(pejoration of meaning) に対する。(1) 意味の特殊化 (specialization of meaning) による良化。例えば、fame は本来「報告、話」一般を意味していたが、意味が特殊化し、現在では「名声、評判」などの望ましい意味で用いられることが多い(ただし、a house of ill fame (売春宿)。類例として、"praise" (価値判断をする→賞賛する)、earl (男→伯爵) などがある。』とある。  
また、*Shorter English Dictionary of Oxford* 2003 年版でも 'raise' を archaic としながらも1つの意味として 'appraise' と定義している。
- 9) 「ambivalence <反意依存> : 一つの語の中に相反する二つの意味が共存してること。」(英語語源辞典 寺澤芳雄 研究社 1997年 1099 ページ)
- 10) *Newsweek*, Nov. 3, 2003, p.33
- 11) "The statistics are truly mind-boggling. ... In the U.K., kids younger than 16 drink twice as

much as they did 10 years ago, chugging five pints of beer a week. ... In Denmark, the number of 15-year-olds drinking at least once a week has spiked from 20 percent to 39 percent for girls and from 37 percent to 50 percent for boys since 1980. The French have never shied away from a Pernod or a good glass wine – in 1990, 45 percent of 12- to 18-year-olds in France were drinkers, a lot by anybody's standards. Now the figure is 70 percent. ... The surge has been no less radical in the East. Alcohol consumption has always been high in the former communist countries of Europe. But it's run amok. Drinking among young people has quadrupled in Lithuania, doubled in the Czech Republic and risen 25 percent in Slovakia. ...”, “Unsurprisingly, the liquor industry has come under a barrage of criticism by everyone from parent's associations to governments...” underlined by the author (*Newsweek*, Nov. 3, 2003, pp. 33-34) (下線は筆者) このように事例の本文中多数の箇所で、現在形と過去形を組み合わせたり、完了形を使用し対照することで以前とは状況が違ってしまった、変わってしまったというメッセージを伝えている。それを見出しを “Progressive form” で表現することで簡潔に読者に伝えている事例である。

12) *Newsweek*, April 14, 2003, p.50

13) The Oxford Dictionary of ENGLISH (2003) says “it isn't over till the fat lady sings used to convey that there is still time for a situation to change. [by association with the final aria in tragic opera.]”、このように「まだ時間がある」と解説している。

14) 事例と下敷きに使われた慣用表現を合わせて考えた場合のポイントは、'finish closing' かどうかである。この点から Cliff Goddard が “Semantic Analysis” の立場から解説している 'imperfect paradox' の用語がこの事例中に使われている 'Progressive aspect' の理解の一助となる。

“ ...An interesting property of accomplishment verbs is that the progressive aspect does not entail that the change of state has come about: the table is not *clean* until one has FINISHED *cleaning* it. This property, which is sometimes called the 'imperfect paradox' , can perhaps be modeled in the following explication.

X *was cleaning* Y =

X wanted Y to be clean

because of this, X was doing something to Y for some time

one could think at this time:

if this person does this some more, after some time Y will be *clean*”

(*Semantic Analysis*, Cliff Goddard, Oxford University Press, 1998, p.283)

15) *Newsweek*, Dec. 26, 2005 / Jan. 2, 2006, pp. 30-31

16) CAMBRIDGE Advanced Learner's Dictionary (2005) says “fiddle while Rome burns: to enjoy yourself or continue working as normal and not give any attention to something important and unpleasant that is happening that you should be taking action to prevent: Environmentalists claimed governments were fiddling while Rome burned.” 「現実の大変な問題に目を向けず安逸な状況に慕っている」と定義している。

17) *Newsweek*, July 4, 2005, p.61

18) 『歴史的現在』は、小説で最も一般的に用いられ、その特徴は、語り手が、自分が語っている事柄をあたかも目の前で起こっているかのように述べるということである。劇的現在 (dramatic present) と呼ばれることがある。……中略……歴史的現在は、小説に限って用いられるだけでなく、日常会話においても見られる。ただし、歴史的現在完了形 (historical present perfect)、歴史的現在進行形 (historical present progressive) も用いられることがある。通常の過去時制の文とともに用いられ、出来事が過去であることを示す副詞表現が用いられること

が多い。[2] *Last week I'm watching Newsnight on television when suddenly there's a terrific explosion. You'll never believe this, but my whole TV-set was gone; it had, as they say, "imploded".— [Declerck, 1991]』*

- 19) "An O NP, coding the Impression role, may be omitted after verbs in the LOOK and WATCH subtypes (a preceding preposition will then also drop). A sentence such as *He is listening / looking / staring / hunting / checking / exploring / watching* simply focuses on the way in which the Perceiver is directing their attention, without noting any specific Impression to which it may be directed." (*A Semantic Approach to English Grammar Second Edition* by R. M. W. Dixon Oxford University Press, 2005, p. 133) とあり Progressive aspect の例を示し、目的語 O の省略を説明している。

これに関し、“Recoverability condition (on deletion)” (削除に関する) 復元可能性の条件’ という概念から、動詞 ‘watch’ とは異なるが ‘read’ の後の代名詞 ‘it’ の省略例を進行相とともに、コンサイス英文法辞典 安井稔 [編] 三省堂 1996年 p. 679) に示されている。『文中において、あるべき要素がかけている場合、それを省略と呼ぶなら、省略はいくつかのタイプに分けることができる。……中略……iii 個々の単語の語彙的特性によって、省略が可能となるもの。例えば、*He was reading (it)*. は it が無くとも可能であるが、*He took \* (it)*. は it を欠くことはできない。これは、read と take の動詞の特性の違いによる。』省略は動詞の特性、つまり種類によると述べているが、動詞の種類分類方法は学説により諸説ある。

- 20) *Newsweek*, Oct. 17, 2005, pp. 18-19

- 21) *Newsweek*, Jan.31, 2000, p.4

- 22) こうしたすべてのことを言わず、抑えてかえって印象を強めようとするレトリック ‘Understatement’ の一つ ‘Meiosis’ に関し、前掲書 *The Forest of Rhetoric Silva Rhetoricae* では ‘Figures of Subtraction’ の中で ‘Meiosis’ を “If not strictly ‘subtraction’, meiosis is a kind of semantic reduction: the reference to something with a name disproportionately lesser than its nature.” と定義している。

- 23) 事例の本文中の終わり近くで結論として、“But the council conceded it didn't yet have a definitive explanation. For now, Spaniards will just have to keep their curiosity on ice. *A frozen mystery*” (Ibid) とあり、‘the council’ は同記事でその少し前の ‘Spain's Higher Council of Scientific Investigation’ を指す。

- 24) 『進行相と非進行相の使用頻度の割合を統計で見ると、進行相の文は5%、非進行相の文は95%、という数字がある (cf. Quirk et al., 19885, p.198)、進行相の文は、学術論文よりも会話において、より高い頻度において見られる。また、イギリス英語の口語よりも、アメリカ英語の口語においてのほうが、使用頻度は高い (cf. quirk et al., 1985, p.198)。』(コンサイス英文法辞典 安井稔 [編] 三省堂 1996年 p.620) と進行相つまり進行形の文体では、表現される場面 (Context)、および英語か米語かによって使用頻度の違いがある点を述べている。

- 25) *TIME*, Dec. 23, 2002, p.69

- 26) 事例の本文冒頭に “If you're confused by all the news about the health effects of eating fish, you're not alone. On one hand, the omega-3 fatty acids in fish are known to reduce the risk of heart disease, as the American Heart Association reminded us two weeks ago when it restated its recommendation that everybody eat at least two fish servings a week…” (下線は筆者) とあり、魚油の効能が周知であると言及している。

- 27) 『‘to’ 不定詞の場合には仮想性の意味があるので、現実にはまだ行為を始めていなくてもよく、-ing の場合にはすでに始まっている。従って ‘to’ 不定詞の場合にはその行動を思い直す余地が

あるのに対し、-ing の場合には思い直す余地はもはやないということになる。

[7] *To wait* would have been a mistake. (もしあの時待っていたとしたら、それは過ちを犯したことになるだろう)

[8] \* *To wait* has been a mistake.

[8] のように現実が生じた過去の出来事を意味する環境では 'to' 不定詞は使えない。』と過去の出来事を要求する文の場合には使えないことに関し、具体例を示して動名詞的名詞化 'Gerundive nominalization' を解説している。

28) 前掲書 *The Forest of Rhetoric Silva Rhetoricae* の項で修辞法用語 'Contrarium' に関し "Juxtaposing two opposing statements in such a way as to prove the one from the other." と解説を付している。

29) *Newsweek*, Sep. 3, 2001, p.17

30) "It all seemed innocent enough until the professor starting talking about the prophet Muhammad and certain practices prevalent in pre-Islam seventh-century Arabia. Among other things, the professor stated that Muhammad was a non-Muslim till the age of 40, that he was not circumcised until then and that his parents were non-Muslims..." と事例の本文中で述べている。

31) It is ~ to infinitive 構文と It is ~ gerund 構文の間に存在する意味の違いについて、『……………[9] It's nice *playing* golf in the rain. (雨の中でこのようにゴルフをするのはすばらしい。[10] It's nice *to play* golf in the rain. (雨の中でゴルフをするのはすばらしい。)[9] は、実際に今雨の中でゴルフをしている人によって発せられるのが普通であるが、[10] は一般的な観察である。』と(コンサイス英文法辞典 安井稔[編] 三省堂 1996年 p.376)で説明している。すなわち、その違いを「実際に動作している話し手から発する表現」と「一般的な観察」との言葉で明確なニュアンスの違いであると指摘している。さらにこの点に関し、

『予備の 'it' (Preparatory it) によって先行される動名詞と不定詞については、I suppose it's useless *telling* you that I expected this. —G. Greene / … he had rotted so far that it was useless *to make* any effort.— Id. 動名詞のほうが具体的な現実の行為を示すことが多い。』(現代英語学辞典 田中春美編者代表 成美堂 1988年 p.360) と「具体的な現実の行為」という言葉で Gerund の用例を説明している。

32) 『Bolinger (1986b) では、'to' 不定詞と -ing を対立させ、前者に対して「仮定性・仮想性」(hypothesis)あるいは「可能性」(potentiality)を認め、後者の -ing に対しては「具象性・現実性」(reification)という相を認めている。』(コンサイス英文法辞典 安井稔[編] 三省堂 1996年 p.375)と述べ、To infinitive と Gerund との用法上の違いを述べている。

33) *TIME*, Nov. 14, 2005, p.60

34) 事例の本文中に "Short-term hormone therapy is still the best medical solution for the relief of hot flashes … Menopause is also a good time to get serious, if you haven't already, about adopting a healthy lifestyle." とあり、TIMING は計画性を含むことが窺われる。

35) 『曖昧性 英 vagueness, 曖昧さ、不明確さともいう。発話 (utterance) の場面や文脈によって、言語表現に異なる解釈が内包されている状態をいい、語彙的意味や統語構造の相違に由来する両義性 (ambiguity) とは区別される。』(言語学大事典 第6巻 術語編 2005年 三省堂 p.1) とあり、本文の Context を考えると、Vagueness の事例と解釈できる。

36) *Newsweek*, Feb. 21, 2005, p.17

37) 事例の本文に "… Provisions may be made to allow Sunni leaders into the National Assembly, perhaps to fill in for members who take ministerial posts. And the Sunnis are still hoping to nab one of the country's three top posts — president, prime minister or assembly speaker — as well as a key ministry or two…" とある。(下線は筆者)

38) *TIME*, Oct. 20, 2003, p. 68

39) 'Ambiguity' は曖昧性、あるいは両義性と訳される用語であるが、二名の研究者の説明を以下に付す。まず Aitchison の定義として

"ambiguity: The possession of more than one possible meaning. This can be subdivided into lexical ambiguity, when a single word can have more than one meaning, as in The detective examined the log (fallen tree or record of a ship' s voyage?), and structural ambiguity, when the arrangement of words gives rise to more than one interpretation..." (*Introducing Language and Mind* by Jean Aitchison, PENGUIN ENGLISH, 1992 年 p.11)

もう一人の研究者 Leech の定義の解説としては、

"... It is true that linguists often assume the ambiguity of a sentence is self-evident to native speakers; but *the nature and extent* of ambiguity is often far from clear, and has to be explicated by resort to context clues, paraphrases, etc. It is arguable that ambiguity can always be reduced to a set of basic statements of the kinds of that we have already recognized. For example, to show why *Hugo is drawing a cart* is ambiguous, I can say that in one sense it is synonymous with (a) *Hugo is drawing a picture of a cart* and that in another sense it is synonymous with (b) *Hugo is pulling a cart*. The ambiguity is then evident from the fact that (a) and (b) are not synonymous with each other... ambiguity is a one-many relation between syntax and sense. Thus we may say that *Hugo is drawing a cart* is ambiguous in that it expresses at least two distinct proposition: 'Hugo is drawing (a picture of) a cart' and 'Hugo is drawing (= pulling) a cart' ..." (*Semantics The Study of Meaning Second Edition*, Geoffrey Leech, Penguin Books, 1981, pp.78-79)

40) *Newsweek*, July 20 / Aug. 1, 2005, p.62

41) この事例中の "Getting there" は 'nominal gerund' と捉えられる。これに関し『nominal gerund (名詞的動名詞) (2) 特徴. (activity or act). 出来事 (event). 過程 (process). などを表わす: John's riding of his bicycle startled them. (彼らはジョンが自転車に乗るのを見てびっくりした) / His rapid drawing of the picture fascinated me. (彼が素早く絵を描きあげたことに魅せられた) ……………』(コンサイス英文法辞典 安井稔[編] 三省堂 1996 年 pp. 483-484) と主語として使われた場合を分類し、その中の特徴の一つを 'process' としている。

42) "Getting" が 'Process' を表している本文中の箇所として、"... but only a connoisseur of thrills appreciates the feeling of getting from here to there in a way that's uniquely his own. 'There's no one doing exactly what I'm doing', ... Adventurers now want to be able to drive themselves anywhere —over land, through the air or under the sea —to places nobody else can reach, or to get wherever they're going faster than anybody else." と具体的例を挙げ、場所への移動活動を楽しむ大富豪の言葉を紹介している。

43) *Newsweek*, June 23, 2003, p. 55

44) *Newsweek*, March 21, 2005, p.61

45) *TIME*, Nov. 4, 2002, p. 35

46) 『相 (aspect) とは、時 (time) との関連で、動詞の様態をどのように捉えるかを表わすもので、具体的には動詞の示す行為が「始まったところ」なのか、「その途中」なのか、あるいは「終わってしまった」のかを言うものである (Greenbaum and Quirk (1990:51), Spears (1991: 19)。その「始まり」を起動相 (inchoative aspect), 「途中」を継続相 (durative aspect), 「終わり」を終動相 (effective aspect) と呼ぶ。英語では、継続相では、進行形 (be + 現在分詞) という文法形式を用いるか、keep (on), continue などの語の助けを借りて表わされ、終動相は、完了形 (have

+ 過去分詞) という文法形式を用いるか、finish, stop などの語を使って表わされる。起動相には、

それを表わす文法形式はなく、通例は、start, begin などの語を用いて表わされる (Declerck (1991: 56)。) (『テンスとアスペクトの語法』 柏野健次 開拓社 1992年 p.107)

- 47) 『……………現在のアスペクト研究の範囲は非常に広くなり、スラヴ諸語の動詞の体を扱っていたかつての研究とはかなり違ったものとなりつつある。しかし、アスペクト形式を示す言語材料が整っていればいるほど確実な研究が可能であるので、アスペクト研究は一定の広がりをもせたのち、再び研究の方向が回帰するのではないかと考えられる。』言語学大事典 第6巻 術語編 2005年 三省堂 p.12)
- 48) 『……………なお、自然現象を表わす文のうち次の (141) (?) The sun is setting at 6:31 tomorrow. のような文は、人間がコントロールできないものであるにもかかわらず、学者により容認性に差が見られる。例えば、Goodman (1973: 81) や Prince (1982: 458) は認めているが、Leech (1987: 64) , Dowty (1979: 157) や Huddleston (1984: 157) は認めていない。』

### 参考文献

- Aarts, B. 'Secondary predicators in English', pp.75-101 of *The verb in contemporary English: Theory and description*, edited by B. Aarts and C. F. Meyer. Cambridge: Cambridge University Press, 1995
- Adrian Room, *Dictionary Of Changing In Meaning*. London: Routledge & Kegan Paul, 1986
- Bizzell, Patricia, and Bruce Herzberg., *The Rhetorical tradition: Readings from Classical Times to the Present*. Second Edition. Boston: Bedford/St. Martin's, 2001
- Bruner, Jerome, *Acts of Meaning*. Cambridge, Mass.: Harvard University Press, 1990
- Cann, Ronald, *Formal Semantics*. Cambridge: Cambridge University Press, 1993
- Comrie, Bernard, *Language Universals and Linguistic Typology*. Oxford: Blackwell, 1981
- Fraser, B., *The verb-particle combination in English*. Tokyo: Taishukan. Reprinted, with corrections, New York: Academic Press, 1976
- Green, G., *Semantics and syntactic regularity*. Bloomington: Indiana University Press, 1974
- Guy Cook and Barbara Seidlhofer, *Principle & Practice in Applied Linguistics Studies in honour of H. G. Widdowson*. Oxford University Press, 1995
- Herric, James A., *The History and Theory of Rhetoric: An Introduction*, 3<sup>rd</sup>. Boston: Allyn and Bacon, 2006
- Hofman, T. R., *Realms of Meaning: An Introduction to Semantics*. London: Longman 1993
- Huddleston, R. D., *Introduction to the grammar of English*. Cambridge University Press, 1984  
<http://www.uky.edu/AS/Classics/rhetoric.html>, Kentucky Classics
- 桑原輝男監訳『言語の進化—英語変化の諸相』東京：研究社 1984年
- R. W. Holder, *A Dictionary of Euphemisms How Not To Say What You Mean*,. Oxford University Press, 2003
- Schmerling, S.F., 'Synonymy judgment as syntactic evidence', pp. 299-313 of *Pragmatics* edited by P. Cole (Syntax and Semantics, 9) New York: Academic Press, 1978
- Smith, W. F. and D. Liedlich, *Rhetoric for Today*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1980
- 田中茂範&松本曜著『空間と移動の表現』(日英語比較選書6)東京：研究社、1998年
- 寺田芳雄・梅田巖訳『国際英語—英語の社会言語学的諸相』東京：研究社、1986年
- Trudgill, P., and Hannah, J., *International English: a guide to varieties of Standard English*. London: Edward Arnold 1982
- Tsohatzidis, S. L. (ed.), *Meanings and Prototypes: Studies in Linguistic Categorization*. London:

Routledge, 1990

Vestergaard, Torben & Kim Schoder. *The Language of Advertising*. Oxford: Blackwell 1985

Wales, Katie. *A Dictionary of Stylistics*. London: Longman, 2001

Wierzbicka, Anna, *Semantics, Culture, and Cognition: Universal Human Concepts in Culture-Specific Configurations*. Oxford: Oxford University Press, 1992

Yoneyama, Mitsuaki & Kaga, Nobuhiro, 『語の意味と意味役割』(英語モノグラフシリーズ17), 東京: 研究社、2001年